

子実トウモロコシ 市場拡大への道



Part
1

トウモロコシ輸入の現状と今後

柴田 明夫

Part
2

環境整備に向けて“団体戦”も始動

柳原 孝二／盛川 周祐／宮川 正和／小泉 輝夫／塚原 昇／末柄 淳／昆 吉則

10年ほど前から始まった日本の子実トウモロコシ栽培。先駆者たちの活動が、徐々にではあるが実を結びつつある。転機を迎えたといってもいいだろう。かつては消極的だった行政も、ようやく重い腰を上げはじめた。地域差はあるものの、バックアップ体制も整えられようとしている。

生産者にとって、飼料原料の輸入価格上昇も追い風だ。国産原料との価格差が縮まれば、競争力も高まる。加えて、水田転作した麦などの連作障害が各地で生産者を悩ませるようになってきた。その意味でも、輪作体系に土壤改良効果もあるトウモロコシを組み込む価値はある。

とはいえ、課題もまだまだ多い。今回は、子実トウモロコシ普及に取り組んできた先駆者の最新情報を交えながら、市場拡大に向けた動きを特集する。

トウモロコシ輸入の 現状と今後

日本での生産拡大に追い風となるか

柴田 明夫

(株)資源・食糧問題研究所代表

筆者プロフィール

1951年生まれ。東京大学農学部農業経済学科卒業後、丸紅(株)に入社、鉄鋼・調査部門を歩む。2001年丸紅経済研究所主席研究員、2010年同代表を経て、2011年10月(株)資源・食糧問題研究所を開設、代表に就任。農林水産省「国際食料問題研究会」など各種委員を歴任。

本稿では、わが国が毎年1500万t規模で輸入する代表的な飼料穀物であるトウモロコシを中心に、22年の市場を占った上で、水田活用の一環としてトウモロコシ自給に向けた取り組みの必要性を論じてみたい。グローバリゼーション(＝農産物自由化)の下、食料・飼料ひいては農業そのものを極限まで海外に依存してきたことの日本の危うさが、問われなければならない。

高止まりする穀物価格

トウモロコシと 小麦価格逆転の背景

シカゴ穀物市場では、2015～20年前半にかけて大豆、小麦、トウモロコシとも比較的安定した値動きが続けてきた。しかし、20年8月以降急騰に転じ、大豆、ト

ウモロコシ、小麦が主役を入れ替える形で相場を牽引してきた。特に、21年に入ると騰勢は一段と強まり、5月には、大豆が1ブッシェル(大豆、小麦は27・2kg、トウモロコシは25・4kg)＝16ドルを突破し、13年7月以来、8年ぶりの高値を付けた。この間、小麦、トウモロコシもそれぞれ7ドルを突破するなか、トウモロコシが小麦価格を上回る現象が生じた。通常、両作物の間には1～2ドルの差があり、逆転劇は初めてのことだ。

その後、穀物価格は、21年8～11月にかけて調整色を強めたものの、年末・年始にかけて再び上昇に転じ、22年2月2日現在、大豆15・45ドル、小麦7・55ドル、トウモロコシ6・23ドルまで水準を切り上げている(図1)。

シカゴ穀物市場で、トウモロコ

シ価格の騰勢が強まったのは、20年10月以降である。最大の要因は中国の「買い」である。特に、米国と中国両政府は20年8月、米国農産品の輸入を大幅に拡大する貿易協議「第1段階合意」(米国の対中輸出額を2年間で2000億ドル(約22兆円)増やす内容で、大豆、トウモロコシなど500億ドル規模の農産物の購入を含む)の「進展」を確認した。これを契機に中国は、米国産トウモロコシの買い付けを本格化させた。米農務省によると、20年後半～21年前半の中国のトウモロコシ輸入量は2951万tで過去最高となった(図2)。とはいえ、中国のトウモロコシ生産量が減少しているわけではない。トウモロコシ生産量は2億7000万tを超え、米国の3億8000万t台に次いで世界

第2位の生産国である。しかし、3億t近い国内需要(飼料用、食用、工業用)に追い付けない。

中国は1959年の建国以来トウモロコシ、小麦、コメなどの食糧については、自給政策(国内生産を95%以上とする)をとり、輸入はウクライナなどから毎年度500万t前後に止まってきた。しかし、2020年から輸入が急増し、メキシコ(1650万t)、日本(1540万t)を抜き、世界最大のトウモロコシ輸入国に躍り出た。21/22年度は、トウモロコシ2600万tの輸入を維持するのに加え、バーレー小麦、ソルガム(穀草)などを含む粗粒穀物の輸入量は5000万tに迫る見通しだ。大豆の輸入量も1億tに達し、小麦の輸入も1000万t前後に急増している(図3)。

図1：シカゴ市場における穀物価格推移

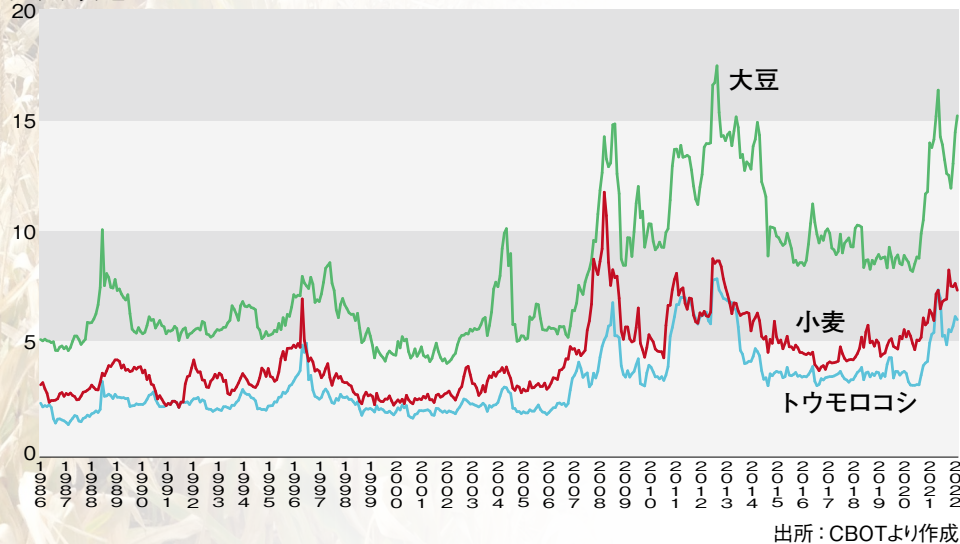
ドル／ブッシェル
20

図2：中国のトウモロコシ需給（単位：1,000t）

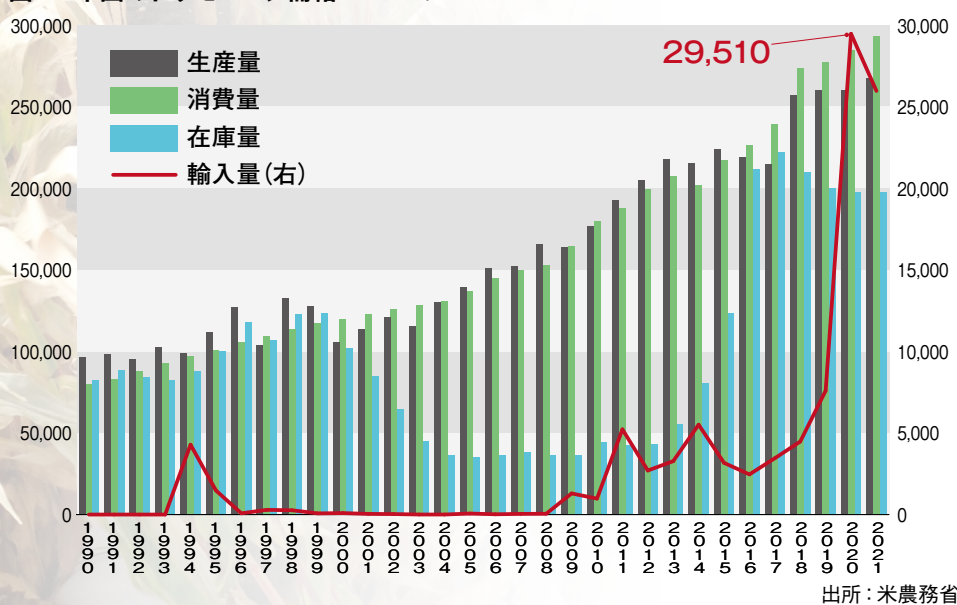
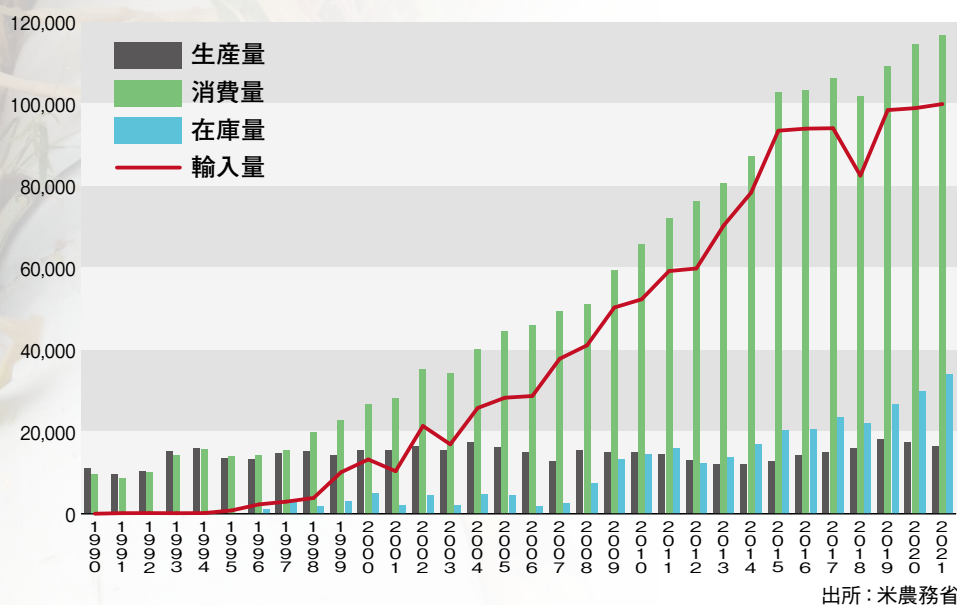


図3：中国の大豆需給（単位：1,000t）



「残飯養豚」から「企業養豚」へ
中国の「穀物爆買い」は続く

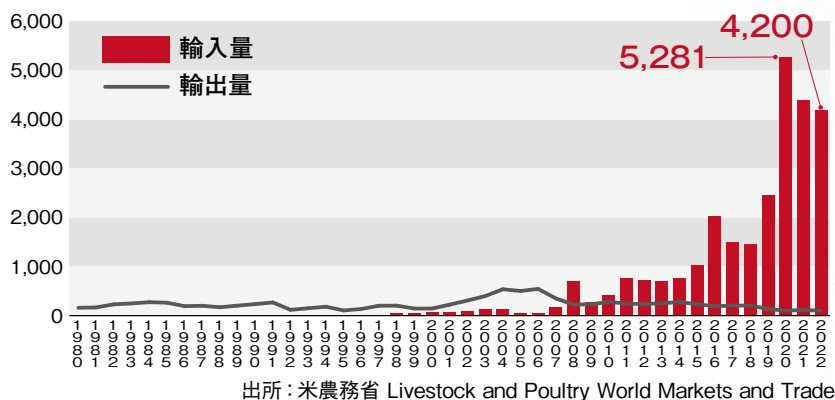
中国の食糧輸入拡大は止まりそうにない。「養豚産業の立て直し」を進める中国独自の理由があるためだ。中国では食肉の7割近くが豚肉だ。中国にとって豚肉は、慶

事に不可欠な食料でもあり価格が上昇すると社会不安が醸成される。このため政府は、自国で豚肉を賄うことを国策としてきており、2010年ごろまでは輸入量も50万t程度に止まっていた。しかし、近年は、豚O型口蹄疫や豚流行性下痢（PED）の発生、繁

殖用母豚の頭数減少などから豚の飼養頭数が減少傾向にあり、豚肉生産量は頭打ちとなっていた。一方、消費量は増加を続けていることから輸入が急増。16年の輸入量（枝肉ベース）は216万tと日本の136万tを超え、世界最大の豚肉輸入国となった。20年

の豚肉輸入量は528万tの過去最高となった（図4）。これは、世界の豚肉貿易量（1093万t）の約半分を占める。主な豚肉輸入先は欧州（スペイン、ドイツ、デンマーク、フランス、イギリス）、カナダ、米国だが、最近ではチリなどからも輸入が確認されている。

図4：中国の豚肉輸出入 (単位：1,000t)



消費量が拡大するなか、中国の豚肉輸入を加速させたのがアフリカ豚熱（ASF：African Swine Fever）だ。18年夏に発見されたASFは、瞬く間に中国全土31の省・直轄地に拡散した。ASFは、強い感染力と致死性をもつウイルス性の伝染病で、有効なワクチンが無いことから、感染が確認されると発生場所周辺の豚は全て殺処分される。

米農務省によると、中国の豚の飼養頭数は15年時点で4億760万頭であり、世界の飼養頭数8億159万頭の過半を占めていた。その大半は、豚の飼育に残飯（廃棄食品）を与える「残飯養豚」といわれる中小零細規模の養豚農家であり、非衛生的で消毒処理などが不十分であったことから感染が広がった。

ASF感染による殺処分により20年の飼養頭数は3億3104万頭（一時は2億7500万頭）まで減少した。感染地域では、小規模（50頭以下）の養豚農家が養豚を断念し始めたほか、10000〜20000頭規模の中規模養豚場へも影響が及んだ。

中国の豚肉生産量も、14年の5719万t（世界の約半分）から20年は3800万tに減少。5000万tを超えていた消費量も20年には4305万tまで減少したが、生産量の落ち込みほどではなく、国内では豚肉需給がひっ迫し、豚肉価格が高騰した。このため中国政府は、現在、ASF克服とともに養豚事業の再生に力を注いでいる。小規模農家の養豚を廃止して、吉林省など国内各地に大規模な養豚場を建設中だ。「残飯養豚」

から「企業養豚」への転換である。しかし、そのためには良質で大量の飼料（大豆ミール、トウモロコシ、低級品小麦など）の安定的供給体制をいかに構築するかが不可欠である。この要求に應えるためには、米国、中南米、ウクライナなどからの穀物の大量輸入が前提となる。世界の穀物貿易量は急拡大しているものの、安心できないのは、輸出国・輸入国とも、これら限られたプレーヤーに依存するようになっていくことだ。

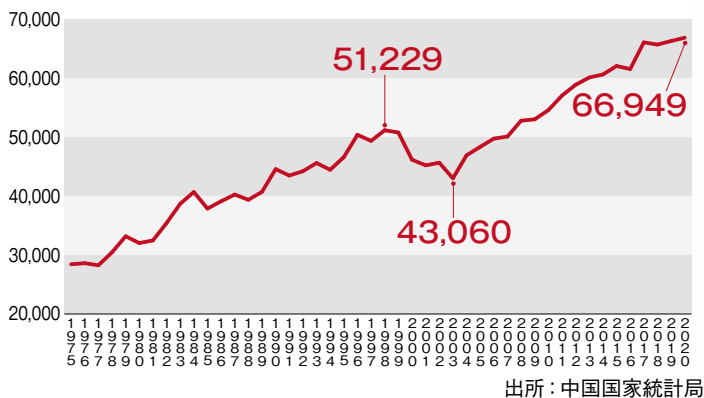
豊穡の中で食べ残し禁止令

「転ばぬ先の杖」を10年先につく中国

中国の食糧生産に問題があるわけではない。中国国家統計局によると、同国の2020年の食糧（コメ、小麦、トウモロコシ、大豆、いも類を指す）生産量は6億7000万t弱で、過去最高水準にある（図5）。このうち、コメが1億4900万t、小麦1億3600万t、トウモロコシ2億7000万t強でいずれも史上最高を予測している（米農務省）。にもかかわらず、食糧不安は尽きない。

不安が強まったのは、社会科学院・農村発展研究所が20年8月17

図5：中国の食糧生産の推移 (単位：万t)



日に発表した報告書で、「中国の食糧供給不足量は、25年末までに約1億3000万tに達する見通し」との内容だ。そこでは「都市部での人口増加と農村部での高齢化が進むため」と指摘。農村部では人口が減少し、農家の収入が伸び悩んでおり、政府は食糧安全保障を優先度の高い課題として取り組む必要があるとしている。

これを受け、政府は、「食糧安全保障を最優先度の高い課題として取り組む必要がある」と強調する。習近平国家主席は20年8月下

旬、「食糧安全保障には常に危機意識を持たなければならない」と強調。食品の浪費をやめるよう「食べ残し禁止令」を打ち出した。これを受け、企業や地方政府が相次いで食糧の節約に取り組み出し、全人代（全国人民代表大会）常務委員会は21年4月29日、飲食店の大量の食べ残しを禁じ、大食い動画の配信も規制する「反食品浪費法」を可決した。「転ばぬ先の杖」を10年先についているのが中国と言えよう。

さらに遡れば、中国・国务院発展研究センターが12年に、『中国の食糧安全戦略と政策研究プロジェクトチーム報告』として、以下の方針を打ち出している。

中国は1949年の建国以来、「食糧は基本的に自給（95%）を維持する」という姿勢を堅持してきたが、今回の報告は、「食糧安全保障の核心（コア）は、一国の食糧供給が十分か否か、安定しているか否かであり、食糧の出所が国内生産か海外生産かが重要なのではない」と指摘。これまでの基本を180度転換する方針を打ち出した。

背景には、①自給率の低下（都市化、農村高齢化）、②深刻な土

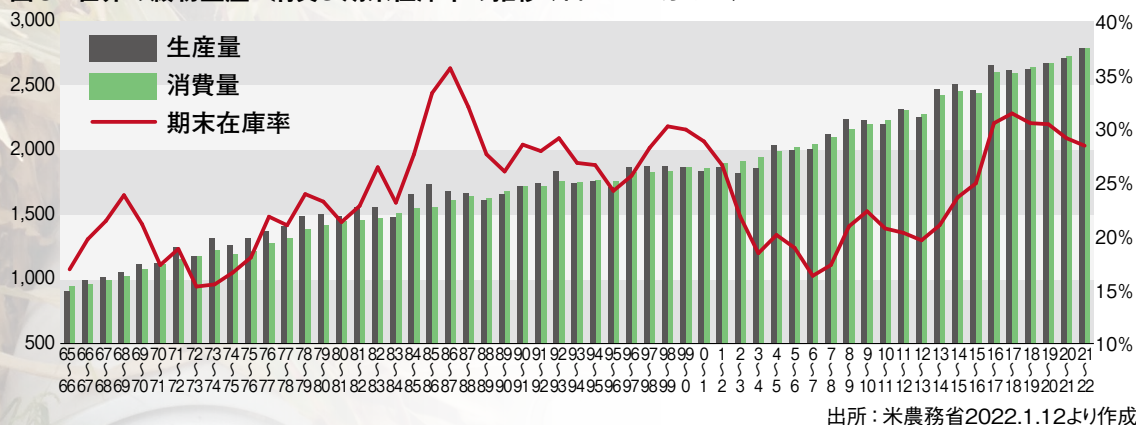
壤汚染、水資源不足、③深刻化する品質問題がある一方、④中国農業の潜在的能力が発揮されていないという認識がある。このため、政府は、「国内に立脚し、生産能力を確保し、適度に輸入し、科学技術により支えられる」という、新しい食糧安全保障戦略を打ち出した。輸入に関しては、食糧輸入能力を高めるため、主要農産物生産国との戦略的提携や海外進出を進めるとしている。

穀物生産量は連続して史上最高を更新

それでも拭い切れない供給不安

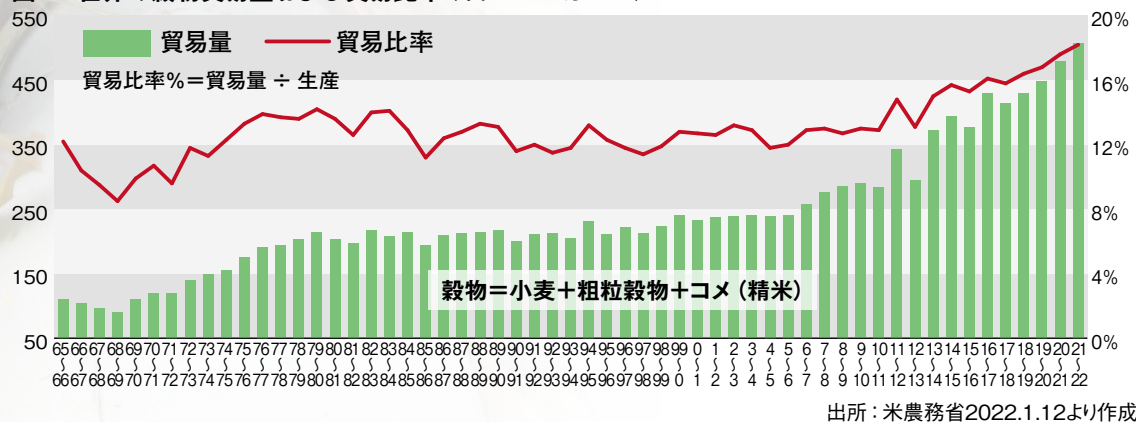
とはいえ、世界の穀物市場では供給は潤沢だ。米農務省が2022年1月12日に発表した最新の需給報告によれば、21/22年度（21年後半〜22年前半）の世界の穀物生産量は27億8852万tで、史上最高を連続して更新する見通しだ（図6）。このうち、小麦の生産量が7億7860万t、コメ5億987万t、トウモロコシ12億696万tで、いずれも過去最高となる。ただ、消費量も27億9170万tで過去最高となり、生産量を僅かに上回ることから、期末在

図6：世界の穀物生産・消費&期末在庫率の推移（単位：100万t、%）



庫量は7億9408万tと、一昨年度の8億t台からは小幅に減少する。21/22年度の穀物貿易量は、5

図7：世界の穀物貿易量および貿易比率（単位：100万t、%）



億748万tで4年連続過去最高を更新し、過去初めて5億tの大台に乗せた（図7）。穀物貿易量は、1980年代から2000年代初

めまで、2億t強で推移してきたが、今世紀に入って2倍以上に増えた格好だ。この数字をみる限り世界の穀物市場はより安定性を高めているはずである。しかし、シカゴ穀物市場では、昨秋より騰勢を強め、むしろ足元のマーケットは一段と不安定化しているといえる。

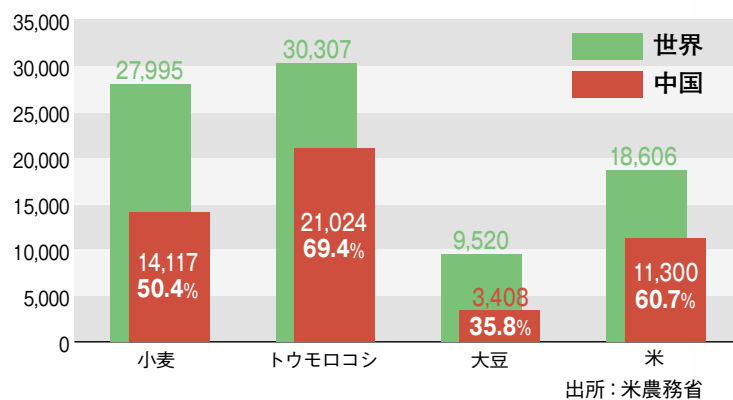
この理由の1つは、市場でのプレーヤーが特定国に限られるようになったことにある。トウモロコシの世界貿易量（輸出）は、17/18年度の1億5438万tから21/22年度1億9624万tへ、5年間で27%強拡大している。しかし、トウモロコシ輸出市場は、米国（6200万t）、ブラジル（4000万t）、アルゼンチン（3800万t）、ウクライナ（3050万t）の4カ国で、世界貿易量の9割近くを占めているのである。この結果、世界の穀物市場は、これから主要輸出国の産地天候、輸出口策などの影響を受けやすくなる。

一方、輸出ほどではないが、輸入サイドでもプレーヤーは限られる。トウモロコシの場合、1億9620万tの輸入量のうち、中国（2600万t）、メキシコ（1700万t）、日本（1590万t）、

ベトナム（1300万t）、韓国（1170万t）、エジプト（1040万t）の6カ国で過半を占める。特に、前述したように、中国のトウモロコシ輸入量は、17/18年度の345万tから21/22年度2951万tへ、この5年間で8・5倍に拡大しており、大豆同様に世界市場でのプレゼンスを急速に高めているので要注意だ。

世界在庫も安心できない。確かに、記録的な生産量が続いた結果、世界の穀物在庫も8億t近くまで

図8：世界の穀物在庫における中国 21/22年度末予測（単位：万t）



積み上がっているが、この約半分は中国の在庫なのだ。

米農務省によると、21/22年度の世界のトウモロコシ生産量は11億9777万tで過去最高となり、期末在庫量も2億9763万tに積み上がるものの、この7割近くは中国の在庫であり、中国を除く世界のトウモロコシ期末在庫率は10%台と、FAO（国連食糧農業機関）が指摘する適正在庫率（17〜18%）を大きく下回り逼迫している（図8）。

「買う力」が失われつつある日本 — 今後は懸念される トウモロコシ輸入 —

日本農業を取り巻く状況は一層厳しさを増している。農林水産省によると、2021年1〜11月期の農産物の輸入額は6382億円で、前年同期比12・1%増加した。しかし、数量ベースで見ると、野菜、果実、食肉（牛肉、豚肉）、穀物（トウモロコシ、小麦）、乳製品など主な農産物や食品の輸入量は、前年割れとなっている。

コロナ禍で外食需要の不振が続いていることや、為替の円安、海上運賃の上昇および輸送の停滞、

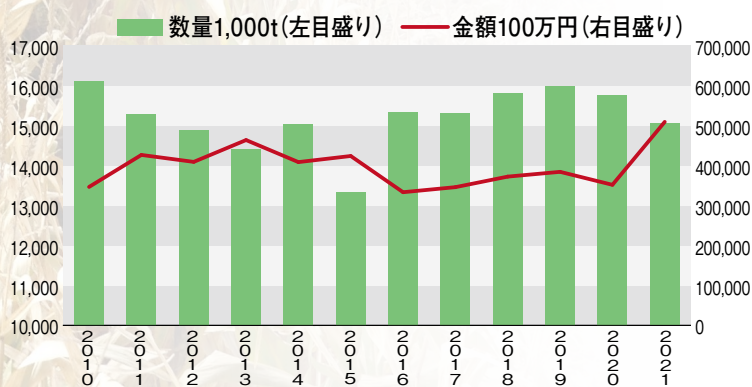
現地価格の高騰や中国との輸入競合など複数の要因がある。しかし、農産物の輸入縮小は、一時的ではなく、恒常的となる可能性が高い。各国ともコロナ禍で自国の食の確保を優先する傾向にあるなか、中国との輸入競合も強まっているためだ。

農業の外部化を極力進めてきたわが国としては、改めて「外部依存の食料システムの危うさ」を検証し、近い将来の食料危機に備えなければならない。

世界の農業の発展に対して、食糧危機の兆候は、食料自給率の低下や食料品価格の上昇として現れつつある。農林水産省が21年8月25日に発表した20年度の食料自給率は、カロリーベースで37%となり、コメの大凶作に見舞われた1993年および2018年度に並び過去最低となった。

食料自給率とは、国内で消費される食料のうち、国内で生産されたものの割合である（政府目標は45%）。もともと自給率が高く、国内供給熱量の5割以上を占めるコメの消費量が長期低落傾向にあることが大きい。日本農業の生産基盤の弱体化が止まらないという、構造的な問題を考えると今後、食

図9：日本のトウモロコシ輸入量&輸入額



出所：農林水産省「農林水産物輸出入情報」より作成

注：2021年は1～11月実績を年換算

表1：日本のトウモロコシ国別輸入量 (単位：1,000t)

年	計	米国	ブラジル	南アフリカ	ロシア	フランス	他
2016	15,342	11,427	3,734	0	102	1	78
2017	15,306	12,006	2,286	550	221	1	242
2018	15,802	14,501	794	360	86	1	58
2019	15,983	10,954	4,682	4	92	1	249
2020	15,772	10,006	5,527	152	68	1	18
2021	15,051	11,337	2,072	—	—	—	101

出所：農林水産省「農林水産物輸出入情報」より作成

注：2021年は1～11月実績を年換算

料自給率はさらに低下してゆく可能性がある。

こうした状況下で懸念されるのが日本のトウモロコシ輸入だ。日本は毎年1500万～1600万t、金額にして4000億円前後のトウモロコシを恒常的に輸入している(図9)。

トウモロコシの用途は飼料用が大半であり、20年の場合は、1577万tの輸入量のうち1162万t(74%)が濃厚飼料の原料として使われている。その他に、コ

ーンスターチやデンプンからできる糖化製品が食品、製紙、段ボール、繊維、醸造原料、異性化糖などに幅広く利用されている。

輸入先は主に米国(1000万t)、ブラジル(553万t)の2カ国で、全体の98%を占めている(表1)。問題は、21年に入って、国際価格の上昇を受けてトウモロコシの輸入価格が1t当たり3万3827円(1～11月実績平均)と、20年の同2万3296円から45%も値上がりしていることだ。しか

も、国際価格高騰の背景にある複合的な供給不安要因を考えた場合には、足元の価格上昇は長期化・定着する公算が大きいことだ。

いかにして日本の水田をフル活用するか

一方、国内農業・食料市場ではコメの消費減少⇨生産減少⇨水田作付面積の減少が止まらない。こうしたなか、トウモロコシの国際価格の高騰⇨輸入価格の高騰は、国内の生産者にとっては水田活用という形でのトウモロコシ増産の追い風となる。

政府・農林水産省も、農業政策の喫緊の課題は、コメの需給対策であり、現行の農地を維持するための農地政策の見直しであるとしている。農林水産省によると、2021年7月時点の耕地面積は435万haで、前年比2万ha減少した。ほぼ毎年2万ha前後、耕作地が減っているのが実情だ。それでも節目の400万haは維持しているが、耕地利用率(耕地面積に占める延べ作付面積の割合)が91.3%で過去最低となったことから、20年の農作物の延べ作付面積が田・畑合計で前年比2万8000ha減の399万1000haとなり、

初めて400万haを割った。

農林水産省は、22年産米の需給均衡には更なる大幅な作付転換が不可欠とみている。そのため22年産の主食用米の需要に見合った適正生産量を675万tと設定。コメの作付面積を約4万ha削減(作付転換)する。すでに21年産米の転作面積が過去最大となる同6.3万haとなっており、実施されれば2年連続の削減となる。農林水産省としては、コメの需要減が続くなか、定着性が高い作物、真に需要がある作物に転換すること、なんとか現在ある水田をフル活用し面積を維持したいとの考えである(水田リノベーション事業)。

また、コメ農家にも先祖代々の水田をなんとか維持したい、条件が許せばコメを作りたいという思いが強い。こうしたなかで、粗上に上がっているのが大豆、小麦、野菜(タマネギ)、飼料用米、子実用トウモロコシだ。いずれの作物も課題が多いものの、米価が低迷するなかで、子実用トウモロコシは、土地利用型でかつ原料高で困窮する畜産、酪農経営を補強し、地域における耕畜連携により持続的な農業・農村を実現させるためにも魅力は大きい。

環境整備に向けて 団体戦も始動

これから子実トウモロコシに取り組もうとする皆さんに、いま苦勞されている皆さんに、そして行政にも、先駆者たちがアピール。黎明期を抜け出し、一歩も二歩も前へ、ともに進もう！

聞き手 昆吉則（本誌編集長）

昆 子実トウモロコシを柳原さんが先んじて始められ、2012年の暮れに弊社主催のA-1グランプリを受賞された。以来皆さんに声かけして府県でも13年から宮川さんと盛川さんが始められ、その翌年に小泉さんに条件の悪い所でもできるってことを証明しようよってことでお付き合いいただいた。

末柄さんは、3年間やったあと、いまはやめていらつしやる。そのことも含めて話せたらと思っております。

最初の何年間かは、農水省や試験研究機関、メディアに呼びかけでも黙殺されるような事態が続きました。いまは隔世の感があります。子実トウモロコシは水田飼料作のひとつだったんですが、22年度から独立項目として飼料用に限らず食品仕向けなどでも交付金の

対象になり、位置付けも変わってきているようです。

ただ、このような変化が起きても、まだまだ様々にボトルネックがあります。先進的に取り組んでこられた皆さんに、これから入っ

最新現況報告 — ランシーズンの作付けに向けて

昆 まず最初に、現在の経営概況と、トウモロコシを始めた経緯について、皆さんそれぞれお話しただけまずでしょうか。

北海道から パイオニアの現在

柳原 北海道子実コーン組合の活動も交えて紹介します。2011年に柳原農場として最初6haから始めました。いまでも10ha弱の作付けをずっと続けてます。

てくる人や行政に対する話をぜひ聞かせていただきたい。いい話だけではなく、困難を抱えながらやっていることをお伝えしたい。皆さんは「見る前に飛ぶ」ように、まだ十分な儲けもないのに、

組合としては、北海道子実コーン組合の前身である空知子実コーン生産者組合が15年に発足しました。その後は北海道全域、今日ご参加の宮川さん含めて秋田・青森からも集荷を始めました。昨年からは東北のものについては、大手商社経由で東北の工場で使っていたくという流れになっています。

北海道内の組合としては480ha97戸の生産者がおります。昨年は、組合の主要メンバーでメイズ

しかるべき投資もしながら取り組んできている。そのことを後に続く人々がどれだけ理解しているか。それがないと特に府県の人々なんかはなかなか難しいんじゃないかなと思っております。

という株式会社を立ち上げました（イギリス英語ではトウモロコシの実際のことをメイズという）。農業者が組織する任意団体では商社と取引ができないので、売り買いをする部分だけを独立させた形です。私の農場と岩見沢市の有岐阜コントラクターの個人が出資して立ち上げました。

（株）メイズでは620ha分のトウモロコシを取り扱っております。昨年の取扱量は5200t。今年



柳原孝二
やなぎはら こうじ

トウモロコシ11ha (2011年開始) 北海道長沼町

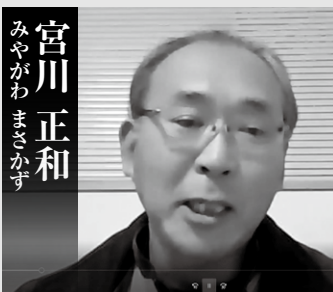
(有)柳原農場・(株)Maize各代表取締役、北海道子実コーン組合代表。42歳、2002年就農。他の経営面積：水稲4ha、小麦14ha、大豆13ha、ナタネ4ha



盛川周祐
もりかわ しゅうすけ

トウモロコシ12ha (2013年開始) 岩手県花巻市

(有)盛川農場代表、70歳、1974年就農。他の経営面積：水稲29ha、小麦44ha、大豆8ha



宮川正和
みやがわ まさかず

トウモロコシ28ha (2013年開始) 秋田県大潟村

59歳、1985年就農。他の経営概要＝ネギ35ha、カボチャ13ha、タマネギ1ha、野菜苗80万ポット。ネギは(株)おがフロンティアファームと(有)正八(埼玉県熊谷市)で生産している。



小泉輝夫
こいずみ てるお

トウモロコシ8ha (2014年開始) 千葉県成田市

1974年生まれ。実家の農業に就いたあと経営移譲を受けてから19年。栽培面積＝約52ha(うち水稲36ha、大豆8ha)。大型機を駆使して乾田直播、転作大豆も。



塚原昇
つかはら のぼる

トウモロコシ0.5ha (養豚経営) 茨城県境町

(株)塚原牧場代表取締役(2002年～)。1966年生まれ。塚原牧場は日本唯一の梅山豚専業農場で母豚100頭一貫経営。食肉加工やエコフィードなどもグループで手がけている。



末柄淳
すえがら きよし

トウモロコシ(最大時2ha) 栃木県小山市

末柄牧場代表。肉牛を飼育するとともに、コメ・麦・ソバ・ニンジン・ジャガイモなどを生産する農園を運営している。

東北から——連作の悩みと ツワモノの参入

サイロも増設しますので、さらに増やして、ここ3年ほどで1万tを目指しています。

盛川 21年度は12ha栽培して98tの収量でした。花巻コーン組合を4年ほど前に立ち上げ、そのときは4人の生産者がいたんですけど、今年は2人減って2経営体でやっています。

昨年は花巻全体で120tくら

いでした。近くの養豚農家の(株)高源精麦に丸粒乾燥で出荷しています。一昨年まではラップサイレージという形で粉碎したものを乾燥なしで出していました。

今年には花巻で昨年より3haくら

い増える予定です。自分はニューホランドのコンバインとコーンヘッダーを使用、組合はクボタの汎用コンバインに普通のリールヘッダーを付けて収穫しています。

宮川 盛川さんと一緒に始めて9作目、昨年は28ha作付けしました。

水田での転作が5ha、残りは畑でやっています。水田転作で始めたのは2年前からで、それまでは全部畑でした。ずっとやっていた豆は昨年やめまして、穀物としてはトウモロコシ一本です。

収穫量は地元の方の約10tと合わせて150tちょっと。売り先としては地元の畜産農家さんに100t弱で、あと柳原さんを通して山形の牛屋さんに約50t出荷しました。

反収は600kgぐらい。長いと

ここでは連作がもう8年とかになり、なかなか畑を回せないのので力が落ちてきて肥料だけではちょっと対応しきれない。やはり堆肥を入れるなりしないと収量的に厳しくなってきたと感じています。

昨年新たに秋田県内で28haいきなり1年目から取り組んだツワモノがいます。70くらいの高齢なんですけど、ものすごく馬力のある方ですね。いままでやってきた大豆体系を入れ、足りない機械を私が貸したりしながら、まず1年間

なんとかやったそうです。初めて
ということでも難儀しましたけど、
今年はもうちょっと慣れるんじゃないか
と思います。

関東から ひとつの壁が破れた

小泉 子実 トウモロコシは昨年
で8作目でした。2年前と3年前に
台風と50日くらい続いた長雨で損
害を食らい、気持ち折れかけま
したが、湿害回避策を打って昨年
は8haに拡大し、仲間を一人誘っ
て約10haに作付けしました。

やれることを全部やってダメな
らもう諦める。それくらいの気持
ちでした。去年の反収は一番良い
ところで1tを超え、悪いところ
と均すと570kgくらい。収穫量
は全部合わせて約50t。強湿田で
の転作という条件不利地でこの数
字だと、やりきった感があります
し、自信にもなりました。

私のところは10a、15aの狭い
湿田ばかりで、しかも生産調整と
いったら飼料用米と加工用米しか
ないような地区です。約7haで56
枚くらいあった一画をまとめて畦
畔をとって合筆し、排水性改善の
ために暗渠を入れて、最終的に15
枚の圃場にしました。縦280m

×幅50mで約1・4haの圃場はだ
いぶ作業性が良くなりました。

去年はそこに堆肥を10a当たり
3・4t、窒素成分を80kg入れた
試験区を作るなど、栽培体系で試
行錯誤をしています。一方で、関
東甲信越に展開する生協のパルシ
ステム経由で養鶏農家との取引が
始まり、ひとつ壁が破れたのか
と思っています。

経営面積約50haのうち、約7割
はコメしか作れません。飼料用米
や加工用米で平均反収10俵超えを
目標に作付けしています。近所で
は離農が増えてきているので、場
所がまとまれば、コメ・大豆・ト
ウモロコシの輪作体系を確立でき
ればと考えています。

畜産農家として 協力農家とともに

塚原 畜産農家として餌を自分で
も作っています。ずっと0・5ha
しか作っていないんですが。

トウモロコシの価格が猛烈に世
界的に上がってきました。原油が
上がるとエタノール用のトウモロコ
シ需要が増えるので、連れて上が
っちゃう。大豆も上がっています。
下がりそうにない。最近はこちら
と諦めていて、国内でどうにかま

かなっていかねばいいなと……。

近所のコメ農家でもトウモロコ
シやってみたって方が出てきて
います。7haやりたいって。それ
ができれば私もで全量を買って上
げたい。いよいよ今年ですね。や
つと餌として体系ができそうだな
っていうところまでできました。ト
ウモロコシは本当に切り札になる
かなと思いますね。

「梅山豚」は年間1200頭ほど
出荷。餌の量は毎日1tくらい。
年間365tのうち100tぐら
いをトウモロコシで賄いたいと思
って参入しました。でも農地拡大
の難しさが凄い壁になっている。
そのため協力農家の方と一緒に展
開しているところです。

自家用での挑戦も 経営的に回せず

末柄 和牛の肥育しながらコメ・
麦・ソバとかを作っています。ト
ウモロコシは、たしか2016年
ごろから4年間作りました。自分
ちの牛の飼料に使えればという単
純な理由からです。飽きっぽい性
格で同じことを3・4年やると次
のことをなんかやないと気が済
まない。

盛川さんのところでデモやるっ

て昆さんから聞いて行ったのがき
っかけのひとつかな。私のところ
は二毛作地帯で、大半の人が米麦
を表裏でやっています。うちの場
合は畑が半分くらいあるのでビー
ル麦とソバの表裏でした。ところ
が麦にソバが混入したりしてアレ
ルギー問題が起きましたね。で、
ソバの代わりにトウモロコシを手
がけたんです。

そんな形で始まったんですけど
ら、トウモロコシを麦のあと6月
中旬に播いて11月ごろ収穫する。
この体系ではどう頑張っても収量
500kgをなかなか超えられない。
周りの人に勧めるような状況では
ありませんでした。11月ごろにな
ると水分の下がりもちよつと悪く
て。自分では最高で2haぐらい作
ったんですけど、けっきょく15年
ぐらい前から始めたジャガイモに
ウエイトを移しました。いまはや
めた格好になっています。

トウモロコシを作っているとき
は、自家粉碎もしていました。で
も手間がかかるんで飼料メーカー
に、混ぜてもらえないか問い合わせ
しましたが応じてもらえなかった。
いま輸入トウモロコシの価格が
上がってますね。1kg20円の時代
では、とても太刀打ちできません

でした。輸入品と同じような値段でつて言われてしまうので稼ぎにならない。地元のNON+GMということで50円とかで買ってくれる人でもいれば別ですけど。

なぜ続けるのか——あとに続く人たちのためにも

昆 北海道と府県を比べると、風土だけじゃなくて地域社会の文化も違いがあるなかで皆さんそれぞれやってらっしゃる。いま思うこと、続けてきた理由を話していただけませんか。

やめた人もいるが改善した圃場を活用

盛川 先ほど、こちらでは2人やめたと話しました。一人は、子実トウモロコシを2haやってたんですけど、全部スイートコーンに切り替えました。人手が最近十分にいて手をかけられるからです。それだけでなく、トウモロコシを何年間かやったおかげで圃場の排水も良くなってきたからとも言っていました。売上も10万を超えたそうです。

もう一人は3haぐらいやってたんですが、クボタのコンバインのリールだとしてもヘッドロ

生産体制も整わず売り込みもなかなかできず、不完全燃焼で終わってしまった感じです。

作ること自体は大したことないと思いましたが、経営として回す

スが大きいのでもったいないと。小麦用からトウモロコシ用に換えるのに手間がかかりすぎるという理由もあげてました。

二人ともそれなりに理由はあるんですけど、せっかく組合としてコンバインを購入したのに、たった1年使っただけで、ほとんど役に立たなかったという状況です。残念です。

やめた人は勢いはあったんですけど、最終的には儲からないというところでしょね。なので、これから一緒に続けようとは言えませんでした。

昆 盛川さんには、2012年の暮れに子実トウモロコシを奨めました。そのときは売り先もないなかで、二つ返事でやると。本当に見る前に飛べる人が進めてきた気がしますね。宮川さんは、もっとしんどいところがあるはずだけど、いかがでしょう。続けてきた理由

のに苦勞してしまいました。収益を考えると、ほとんど稼ぎにならないトウモロコシではなく、安定している麦を取っていききたい。それが本音ですね。

って何ですか。

トウモロコシには未来がある

宮川 やり始めたからやめられないということが一つ。それなりに投資してきて、この作物には未来があるということが支えになっています。柳原さんや小泉さんとか見て、それぞれ問題はあっても、自分で困難を解決してくつていうのは、完全にルールが引かれた上を走るのとは違う。一番得になることだけをするという作戦ではなく、どうなるかわかんないけど、やっぱり自分の思いを最大限つぎ込んで結果は自分がかぶる。そういうことができる作物じゃないかなと思つて続けています。

たしかにしんどい。やってるのはほとんど畑ですから。先ほど盛川さんがおっしゃったことそのままです。初めのうちは気合と根

性でしたが、最近は気合なのか情性なのか。

当初は、農地がどんどん出てきたときに、とりあえず農地を維持する作物が必要になるだろうと思っていました。全部同じようには手をかけられない。そのときに1ha1時間の労働時間ででき、一人で多くの面積を管理できる作物としてトウモロコシに将来どっかで出番が来るだろうと考えました。収支というよりも圃場管理作物という感覚です。

でもトウモロコシの潜在能力、労働時間の短さを発揮しきる状況にはまだなっていない。政策やコメの事情が関係しているんですけど。でも方向性としては間違っていない。そんな思いで、いまも続けています。ただ、自分が思ってたよりも変化のスピードが遅い。それに自分の気持ちもどこまでついていけるか……。

私のところから1時間ぐらい離れた中山間地に元水田を12haほど借りていました。条件があまり良くないけど、トウモロコシでなんとか回せないかと。パツと行つて管理してくるつもりで。

よそ者なので遠慮しながらやっていましたが、いまは一時撤退し

ています。本来であれば、そういったところでトウモロコシをやっていく道があるなど感じています。

昆 宮川さんは大潟村で営農してコメを一粒も作っていないという特殊な立場でトウモロコシをやっています。農水省がほめたたえるような野菜とか花とか、高収益作物もやっている。自分はコメじゃないっていうことで始められた。なかなか周りの環境含めて乗ってこないというところですね。

条件の悪い農地 発展のカギは基盤整備

小泉 障害は多いと思います。興味は示してもやらない。千葉県の農林部を含めて、そもそもトウモロコシ作りを学ぶ気もないという人ばかりです。

去年千葉県のコシヒカリの概算金が9000円でした。メインのふさがねは7200円。たぶん今年も良くないねと騒ぎにもなっています。農業を続ける一番の要因として、やはり儲からないとダメですね。

品代を高くするのはなかなか難しい。きちんと交付金のメニューを組んでやってもらわないと。5年水張りの問題をきっかけに、5

年後にどうなるのか真剣に考えています。いまは逆にピンチはチャンスなので儲けるための方策を整理していきたい。

私のところは、外車コンバインが使えないような地理的状况にあります。国産の汎用コンバインは毎日のように壊れる。そのへんの問題をどうクリアするのか。

千葉県、それもこの辺りは基本的に湿地地帯で、トウモロコシを作るような乾田化に向けた基盤整備が進んでいません。

昆 あなたのところは谷地田の条件不利地だけど、ここでもできるということ示すためやってみてよと、2014年に頼みましたね。それから8年間苦勞しながら続けてきた。暗渠を掘り、ブルで山を

削って農道を広げたりして。

小泉 そうです。冬はずっと朝から夜8時ごろまでライトをつけて暗渠作業や合筆をしています。条件の良い地域では別でしょうが、うちのようない地域では普通の人はできないと思います。そんな場所でも契約先を裏切らないために、アップカッターロータリーを掛け、畝立て播種をして作っているんですよ。ニューマチックシーダーも持っているのに。条件の良い場所での作業時間なんてとても実現できない。ましてや冬の間の作業時間考えたら。

水田農業地帯で経営発展のカギである基盤整備がここではまったく進みません。僕一人頑張っても行政が付いてきてくれない。子実

トウモロコシに政策が付いてきたのはいいけど、この場所で土地利用型経営を発展させようと考える人間に対する基本的支援を考えてほしいですね。そういう条件がなければ後に続く人が出てこないと思います。

昆 まったくだね。

塚原 僕は畜産が専業ですので、7作やってみて作るというのは難しいんだなーって思いましたね。収穫後から豚の口までについては、だいぶ慣れてきました。私どもの倉庫は100tしか入らないので、それ以上取れた場合にはどうするか、そういったことも冷静に考えられるようになっていきます。7作やった経験は無駄じゃなかったですね。これからが楽しみです。

交付金

5年水張り問題も経営を大きく左右する

昆 子実トウモロコシは盛川さんのところの高源精麦にしる塚原さんにしる、国産Non-GMを使って商品の付加価値を高めようとする畜産家がいて成り立ちます。

当初、自家配合している養豚家が全国で100カ所ぐらいあるという話を聞いたんですけど、自家配合は名ばかりで、飼料メーカーに

我々はこうやってきたっていう話を聞かせていただけませんか。

「なるよつになるさ」では 打開できない

柳原 北海道も最初からうまくいったわけではありません。頑張ってくれる仲間がいたからっていう言葉に尽きますね。販売先にも苦

労しましたし、交付金も今のよう
に潤沢にもらえる環境になかった。
昆 どうして栽培が広がったのか。

柳原 私の地元の長沼町や隣町の
岩見沢市で組合が発足するときに
は、たった29軒でした。当時は水
田活用交付金のなかの飼料作物3
万5000円だけで、全然採算が
合わない。トウモロコシの作付け
で、麦や大豆が収量アップ、水は
けが良くなる、作業の分散、雑草
対策が図れる。そこに価値を見出
したわけです。その後どんどん拡
大して、昨年100軒近くになり
ました。組合員以外を含めると1
50軒になっています。

例の5年水張り問題。産地交付
金3万5000円カット、地域で
配分の裁量がある部分もなくなる
のかなというふうに理解しています。
最近の説明会ですと5年後の要件
はまだわからないって農水省が言
い出しました。一律カットになる
のかどうかについては言葉を濁し
ています。

農水省は10a4万円ぐらい手取
りとして残るように考えて数量払
いするとか、戦略作物助成ってい
うものを想定しているらしい。ト
ウモロコシについては、10a当た
り9000kgとすると、1kg30円で

計2万7000円。所得4万円に
するためには、6万4000円の
何らかの交付金が必要でしょう。

私たちの組合では、その試算を
まとめたスライドを作って国会議
員や農水省に話をしています。他
の作物と比べてずば抜けて高い交
付金がないと再生産できないわけ
ではありません。小麦の2倍取れ
ますし、大豆よりも所得は大きく
なる。トウモロコシ自体が見劣り
することは無いと思つてます。

いま言った4万円ぐらいの所得
が全くなかったときに、水田転
作でやってきた農家は経営が成り
立たなくなります。農協も崩壊す
るし、土地改良区・水利の問題も
起きてくる。政策金融公庫は返済
してもらえなくなる。日本の農政
全体に関わってきますので、一律
カットっていうのはどう考えても
ありえない。何らかの他の対策が
出てくるんじゃないでしょうか。
何も活動しないまま、なるように
なるさつていうことではちょっと
まずい。この部分は声を大きくし
て言っていきたいですね。

長沼町の場合、産地交付金は1
万2000円。戦略作物の3万5
000円と合わせて交付金総額4
万7000円になります。岩見沢

市は地域枠が増額されて7万10
00円、当別町は7万8000円
になっています。

地域の多くの農家が栽培するよ
うになって、やっと行政も支援し
てくれるようになった。1軒2軒
では、すぐに交付金がつくってい
うことはありません。一応北海道
では拡がりましたが、全国に向け
て拡げていきたい。

地域によって異なる 交付金運用

末柄 うちの水田ばかりじゃなく
て半分ぐらい畑なので、もう交付
金をあてにしていけないし、できない。
昭和20〜40年ごろに、灌漑施設を
準備して井戸とか掘って、陸田と
して水田登記したものがいまだに
生きています。水がとりあえず使
えるので交付金の対象になってい
るようなところも若干あります。
でも根っからの畑は交付金関係な
い。そんななか手間がかからない
ということ、トウモロコシに少
し手を出しました。

だから柳原さんの交付金の話を
聞くと、羨ましくて仕方ない。地
域交付金などが地元に乗ればいい
のに、なかなか……。栃木県は北
海道に次ぐ酪農地帯なんです、

県のほうは「なんで実しかとらな
いんだ、葉っぱまでちゃんとサイ
レージにすれば立派な飼料になる
んだから」と、全くというぐらい
相手にされません。一昨年からだ
ったか、農水省から作付調査とか
で連絡がくるようになりました
が、その程度ですね。

県ではイアコーンのデモをやっ
てましたけど、誰も乗りませんで
した。茎葉まで全部まとめてサイ
レージにすればいいじゃないかっ
ていう堅い頭の人ばかりで、説明
するのも疲れました。

盛川 花巻では、3万5000円
しかないときに、私しかやってな
かったんですけど、市が1万円を
つけました。2年後は拡大分の
み8000円にしましょうと。け
つきよく波及効果はあまりなかっ
たんでしょうね。

各地域の再生協議会は、効果を
見定めながらお金を出しているの
で、出せばなしもしないし、増
額要求にも簡単には応じません。
やはり柳原さんが言うように、参
加者や栽培面積が増えることが行
政を含めて動かす力になるんでは
ないでしょうか。

昆 農水省としても、それぞれの
地域事情を考えているようです。

一律5年で交付金をやめるのかどうか。現段階では、いろんな条件によって変わる可能性があると思いますが言えないように思います。

交付金については、飼料米やWCSへの交付金を減額するほうが正しいんじゃないのか。まさにそ

課題解決に向けて——行政を動かす力も貯えながら

昆虫 地域への拡がりを含めて、政策あるいは地域農政面で感じていることはありますか。

少しずつだが進む 行政主導の普及活動

盛川 花巻の隣の紫波町に水分農産^{みずわけ}という農事組合法人があります。そこは麦とソバをやっているんですけど、今後担い手が減り農地が余っていったとき、地域で農地をどう有効活用するか。そこでトウモロコシが取り上げられています。行政主導で講習会を何回か開いてますね。産地交付金として2万5000円をプラスにするので誰かやらないかと。

柳原 宮城県古川市で、全農が100ha規模で希望者を募って飼料にするという話がありました。そちらでは話題にはなっていない

の部分が交付金のアンバランスを生み、生産者のモラルハザードを起しているんですから。

柳原さんが言ったように、地域でまとまりが出てくるところは産地交付金の使い方が自由になるエリアもある。でも、一人二人でや

んか。

盛川 こっちではまだですね。全農が3年ぐらい前に宮城県でやったとき全然取れなくてやめちゃったことがあります。国がトウモロコシに力を入れはじめたときに、全農としてはほとんど取り組んでいないので、全農宮城でやろうと。餌工場が近くにあるので、そこに持っていけば、貯蔵も流通もあまり問題ないということでした。

宮城県は転作で大豆を主にやっています。1集団10ha、10集団あれば100haで10000tになるので飼料工場に話を通る。農協としてもそういうことであれば支援しないわけにもいかないんで動き出したようです。全農岩手は、それは宮城だからできるというニュアンスですね。

昆虫 かつて岩手の普及センターが

ついているところでは、なかなか難しいのが現実でしょう。この10年間皆さんがやってきたことで少しずつ変わっていくと思います。長沼や岩見沢のように。皆さんには周りにも働きかけていただきたいところですね。

僕を呼んで勉強会を開いたりしたんですけど、その後の動きはないんですか。

盛川

県側はないですね。東北農業研究センターがトウモロコシを奨めているんだけど、なかなか皆さん簡単には乗ってこない。そこで農研機構の親分が岩手県知事に会いに行きました。東北農研で一生懸命奨めている乾田直播と子実トウモロコシを岩手県でももうちょっとと行政がバックアップしてくれないかと。そういう活動が少しずつ少しずつではありますけど進んでいます。

府県では集落営農に 大きな可能性あり

昆虫 北海道の長沼のような水田地帯でも、いま取り組んでいる人たちは、もともと畑作の技術体系を

獲得していました。だから畑作物としてのトウモロコシに取り組みやすかった。府県の水田農家の場合は、まだロータリーの人がほとんどですね。そういう技術背景、経験の差は大きいですよ。

柳原 何年か前までそう思ってたが、実際は府県でも2000〜3000haを集落営農や農業法人で作りたいって声がかかる。珍しいことではありません。

北海道で20年前に水田を全面転作畑（全転）にしたとき、最初の5年10年はなんとかいもののが取れたんですけど、最近はどうい圃場も出てきました。小麦は5〜6俵しか取れない。大豆も100kgそこそこ。これじゃダメだから輪作しようという考えになってきました。

府県の集落営農では一気に土地の担い手がなくなり、2000〜3000ha規模で小麦や大豆に取り組みははじめました、それからちょうど10年ぐらいに差しかかっています。北海道と同じような状況になって、いままさに困っている。そんななかで、これからトウモロコシに興味を持つ方は多いと思いますね。

府県は、一枚の畑は我々よりも

小さいんですけど管理している面積は大きい。北海道はいつまでも農家根性で1軒1社長ですが、集落営農のリーダーは本当に社長で、作物全体を見渡して何が収益性が上がるか深く考えている。だからトウモロコシの収入が低くても麦・大豆で挽回できればいい。

北海道では雇用がないので人件費の話をして皆さんピンとこないんですけど、集落営農の社長さんは、トウモロコシ作ったときにどれだけコスト削減になるか計算をされるはず。すると今度は、府県のほうが一気に伸びてくるんじゃないでしょうか。

昆 以前から、集落営農こそトウモロコシが必要なんだと話しているんだけど、なかなか理解されませんでした。古いタイプの行政担当者が、飼料米が減るからやめてくれとか言われたこともありま

貯蔵施設が整えば 流通コストも省ける

昆 ここからは貯蔵設備の問題について話したいと思います。ご自

身でもサイロを作っていらいっしょる柳原さん、いかがですか。

柳原 3年前に500tサイロ2本、昨年1000tサイロを1本増設、今年はさらに1000tサイロを2本にします。倉庫は拠点の長沼以外を含めて4500t規模です。売り買いを担う(株)メイズから、柳原農場と岐阜コントラクターに保管と調整を委託するという形ですね。岐阜コントラクターでは今年1000tサイロ2本を建てる予定です。基礎はもう出来上がりました。サイロと今までの倉庫を含めてこちらも約4000tぐらい取り扱うことになっていきます。長沼ハブ拠点が柳原農場、一次拠点が岐阜コントラクター。二次拠点は厚真町の長門茂明さん(株)東胆振グレインファーム)の敷地に建設中です。

いまは二次拠点からハブ拠点に持ち込み、そこから一番大きな納品先である苦小牧の飼料工場に向かう。これだと無駄な輸送コストがかかるので、二次拠点到サイロを作って直接苦小牧工場に出荷する計画が進行中というわけです。

盛川 私の場合、いまはフレコンに詰めて運び、一部自分とこの倉庫に貯めています。全部で120

tぐらいなので、ちょこっとだけストックして、雪が降る前には全て高源さんに運び終わっています。

以前はフレコン置く場所もないから、ラップサイレージをやってみました。でも屋外に置くとカラスに穴をあけられたり、ハンドリングも大変になる。なので屋内に置いてフォークリフトだけ使うほうがいいということで、いまは堆肥舎をちよつと広くして、そこにフレコンのまま置いています。

昆 まだ生産力が限定的だけど、高源さんは100ha分以上必要なんですよ？

盛川 たしかにそうなんですけど、蒸気で熱をかけて生のまま粉碎したものと餌屋さんからのものを併用したいって言っています。

昆 混ぜるわけですね。塚原さんは、もともとサイロも作ってらっしゃるけど、貯蔵施設のこととはどのように考えていますか。

塚原 柳原さんの施設を拝見して、私どもにもあれぐらいのものができるとい時代になるといいな。同時に入ってくる飼料米を30t引き受けているので、倉庫が一気にいっぱいになることを考えなくてはならない。うちはまだ平屋倉庫ですので、いずれはと思っ

てます。

昆 需要家の立場として飼料米がやたら増えても困るような話はないですか。

塚原 餌の中の10%を超えると肉質に変化があることは、皆わかっています。ぎりぎり使っているのが現状ですね。一番メリットがあるのは値段です。1kg20円。安いから増量剤的に買うわけです。ただ、補助金下がっていくと高くなるかもしれない。だから飼料米はこれ以上は増えないんじゃないかな。餌としての限界があります。トウモロコシは50%ぐらい配合してもOKですが、飼料米は10%超えるとよくない。定説です。

飼料工場への出荷には 先入観がまだ根強い

昆 流通システムがないなかで、国産トウモロコシを通常ルートに乗せていこうとすると、制度上、既得権益者から余計なことするな

って言われたりしてませんか。
柳原 餌の原料を輸入する商社は全農を含めて数社しかないの、そこ以外から買う発想がないだけで、いざやってみると別に既得権益も何もない。唯一の問題だったのが関税定率法です。

2016年でしたかね、除外規定に国産トウモロコシが入りましたので、一応全国どこの飼料工場でも使えるようにはなりました。ただし原料ベースで混ぜていいのとか細かい規定が全然ない。北海道で言えば、苫小牧は函館税関の判断次第ということになってしまっています。

実際のところは、飼料工場としてはやったことないといけないんじゃないかっていう先入観の方が先行してますね。つい最近も、新しい工場への搬入を目指して税関に問い合わせたら、そんなことできるわけないって門前払いを食らった方から相談を受けました。

北海道の飼料工場のなかで扱っていないのは5社中1社だけで、もうメジャーなものにはなっているんです。でも全国的にはまだ浸透していない。ちよつと難しいのかな。カビの件は、基本的には国産の小麦くずとか大豆くずを扱っているの、あまり問題視されていません。ただ我々も相当量を入れるようになってきて、こちらでも規格を作らないとダメだろうなって。何人か協力いただいで、カビ毒の検査とか、容積重や水分も測る。検査機器が700万円ぐらい、建

物を合わせて1000万くらいかかりました。うちは直接粉碎しているの、必ずしも必要ないんですけれど自主検査もしています。

令和4年の補助事業で、検査機器も対象になりました。府県でもそういう取り組みが増えていけばいいですね。今後は日本としての規格を作るべきでしょう。

団体戦を活かす 全国組織の設立へ

昆虫 いまトウモロコシ生産者の組織化をしようという動きがあると聞きました。アメリカでは、トウモロコシや馬鈴薯や大豆の組合があり、それぞれロビー活動やマーケティングをしている。地域単位の農業ということは別にして、それが先進国の農業のあるべき姿でしょう。柳原さんは北海道内を越えた展開を考えていますか。

柳原 ちよつと別の話なんですけど、北海道では飼料用の2倍以上の価格で菓子用での販売も始まりました。全生産量のうち1割ほどですね。価格の高い食用に向けていく流れもだいぶ出てきました。今度は栽培量が増えた府県でも、この食用部分を伸ばしていきたいですね。

交付金を受けるのにも、団体戦は非常に重要です。まずは各地域に生産者組合を作っていたら、すでに花巻はできて福岡も作りました。1軒しかないところでも仲間集めて組合を立ち上げていたいただきたい。

その上部組織も必要になります。昨年10月に、盛川さんと九州の結城良裕さん（福岡県那珂川市）が北海道に来て、全国組織を立ち上げるようになりました。動きはじめたところです（仮称・日本メイズ生産者協会）。今年になってからは、岐阜県のコントラクター「サポートいび」でセミナーを開きました。2月中には協会設立総会を予定しています。

北海道子実コーン組合には、九州から北海道まで各地の農研機構からバラバラに調査依頼があります。各地で研究したほうがいいと思います。情報の発信という面では交通整理をしたい。上部組織設立はそのためもありますね。

北海道子実コーン組合は、一番遠くで九州グリーンコープに販売してますけれど、できればそこで地元のプロデューサーと連携できるようにしたい。我々は北海道をメインに活動していければなと。

昨年末に農水省へ行った際、団体なのか個人として来るのかって何度も聞かれました。そこにも団体としての価値があるんじゃないでしょうか。

先ほど検査の話をしました。日本でもトウモロコシに特化した検査室を持っているのはうちぐらいだと思っています。昨年は全国のサンプルを集めて調べました。日本のトウモロコシが海外と遜色ない、あるいは海外よりもいいよってことを発信していきたいですね。

当面はリモート中心になるでしょうが、生産者同士の繋がりをもっと深めたい。それに尽きます。協会はそのためでもあります。皆さんの協力をお願いします。

昆虫 国産NoniGMというのは食品のほうのアピールしやすい。マーケティングの上手なところがあるんじゃないかと思えます。これから飼料仕向けでなくても交付金が付くようになるので、その意味でも皆さんが自ら営業することを含め、関係者を地域の中で増やしていくことですね。やっぱり見る前に飛べる皆さんだから拡げていける。これから頑張っていきたい。